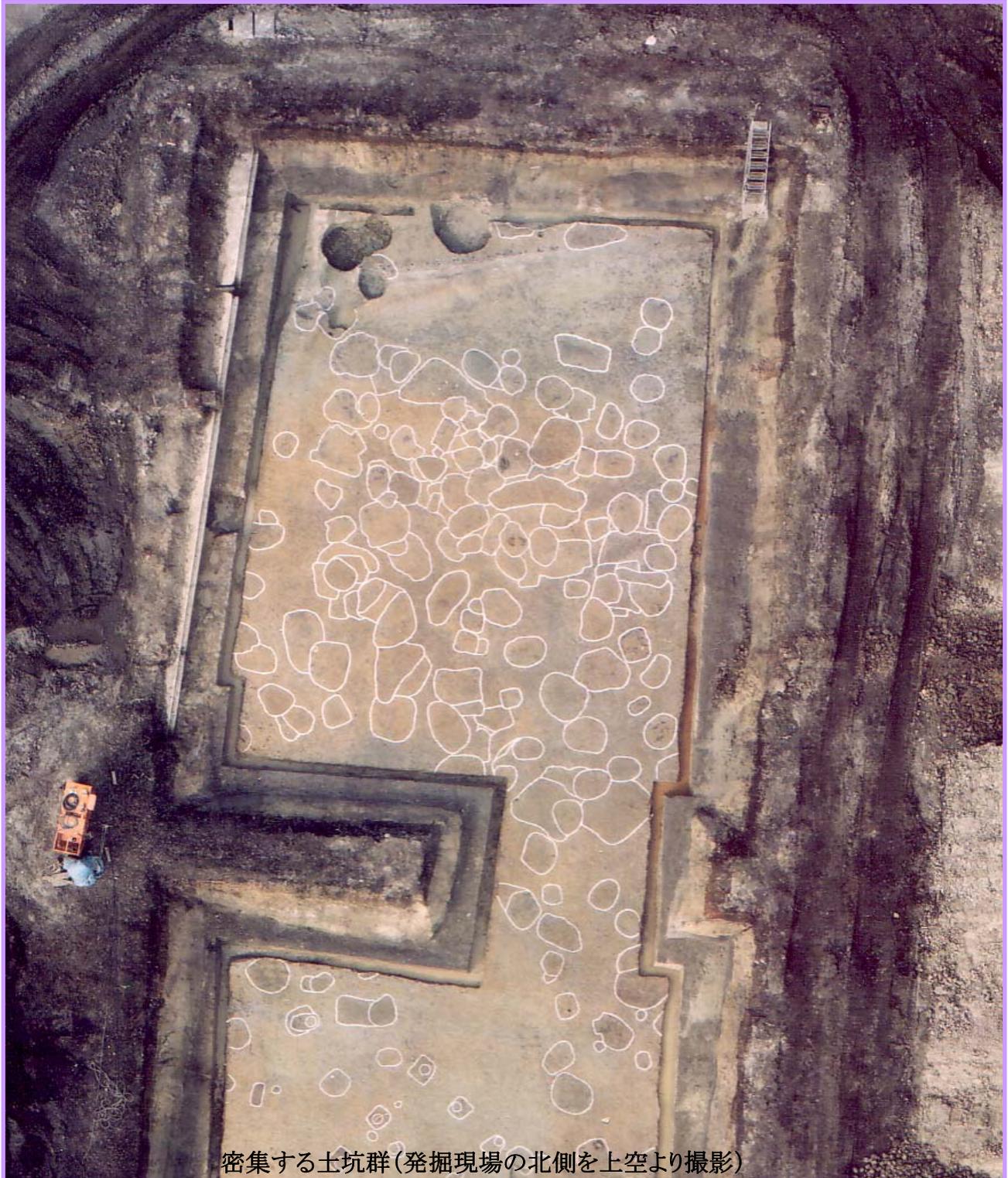


吹田操車場遺跡の調査

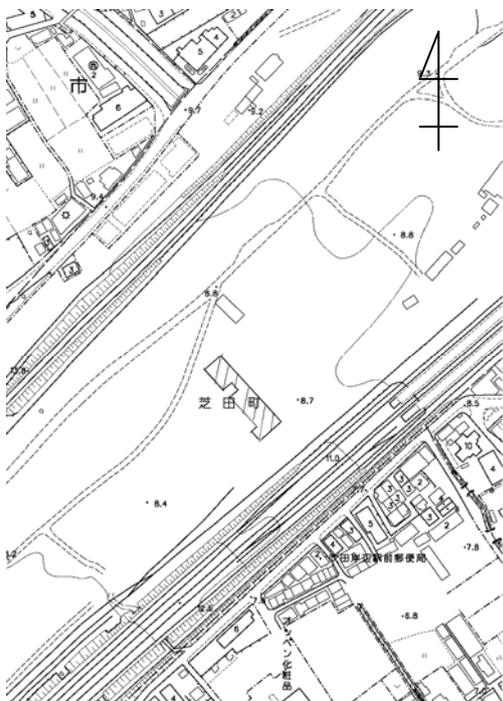


密集する土坑群(発掘現場の北側を上空より撮影)

2007年1月25日

○調査のあらまし

吹田操車場遺跡は、昭和 42 年(1967)に見つかり、平成 10 年(1998)に(財)大阪府文化財センターによって、初めて本格的な発掘調査が実施されました。



今回、吹田(信)基盤整備工事に伴い、計画される範囲(左図)に対し、発掘調査を行っています。

現在、古墳時代から古代(ここでは飛鳥・奈良時代頃か)にかけての遺構が見つかっています。

特に、今回見つかった土坑群(表紙写真)は、「群集土坑」「密集土坑」などと呼ばれ、府内でも近年調査例が増加しています。

これまでの調査成果や研究によれば、墓(一般庶民の墓)あるいは粘土取り穴の2説が有力となっていますが、確定できていません。

今回の現地公開では、それら土坑群を中心に発掘調査を行っているところを見学していただきます。



調査地を西から見た写真(中央が調査地、右手が JR 岸辺駅)

○遺構の検出状況

ここでは、現地地面から約2mほど掘り下げたところで、古墳時代から古代にかけての遺構が見つかりました。

右図のように、調査地の全面で古墳時代から古代までの密集した土坑群が見られる他、南北方向に軸を持つ2間×3間(約 3.6 m×5.4m)の掘立柱建物跡、井戸跡等が見つっています。なお、この建物跡は柱穴が方形であることから、奈良時代頃のものと考えられます。

また、出土した遺物には、古墳時代後期から平安時代までの土器や瓦等が見られます。



どこうぐん
土坑群



建物跡 (掘立柱建物跡)



遺構平面略図

〇見つかった土坑群 どこうぐん

今回の調査で見つかった土坑は、全部で 300 基以上を数えます。調査では、土坑に埋まった土を観察するために下の写真のように、まず半分だけを掘り下げ、写真を撮影したり、図面を作成したりします。その後、土坑に埋まった残りの土を全て掘り下げていきます。それらの作業によって、土坑がどのように埋まったか、土器がどのように残されているのかなど様々なことが分かります。



穴を掘った後、しばらくしてから自然に埋まったもの



穴を掘った後、すぐに同じ土で意図的に埋め戻したもの（黒っぽい色のブロック土が混じる）



土坑より出土した

す え き かめ
須恵器※甕 2例

上段の写真

土坑が埋まった上で甕の底が出土。

下段の写真

土坑の底で甕が出土



土坑内で出土する土器や埋まった地点に共通性が見られます。他に はじき 土師器※や瓦なども出土しています。

※須恵器は、古墳時代中期に朝鮮半島からもたらされた技術（かま 窯・ロクロ）で作られた硬質の器。土師器は、弥生土器から続く素焼きの器。